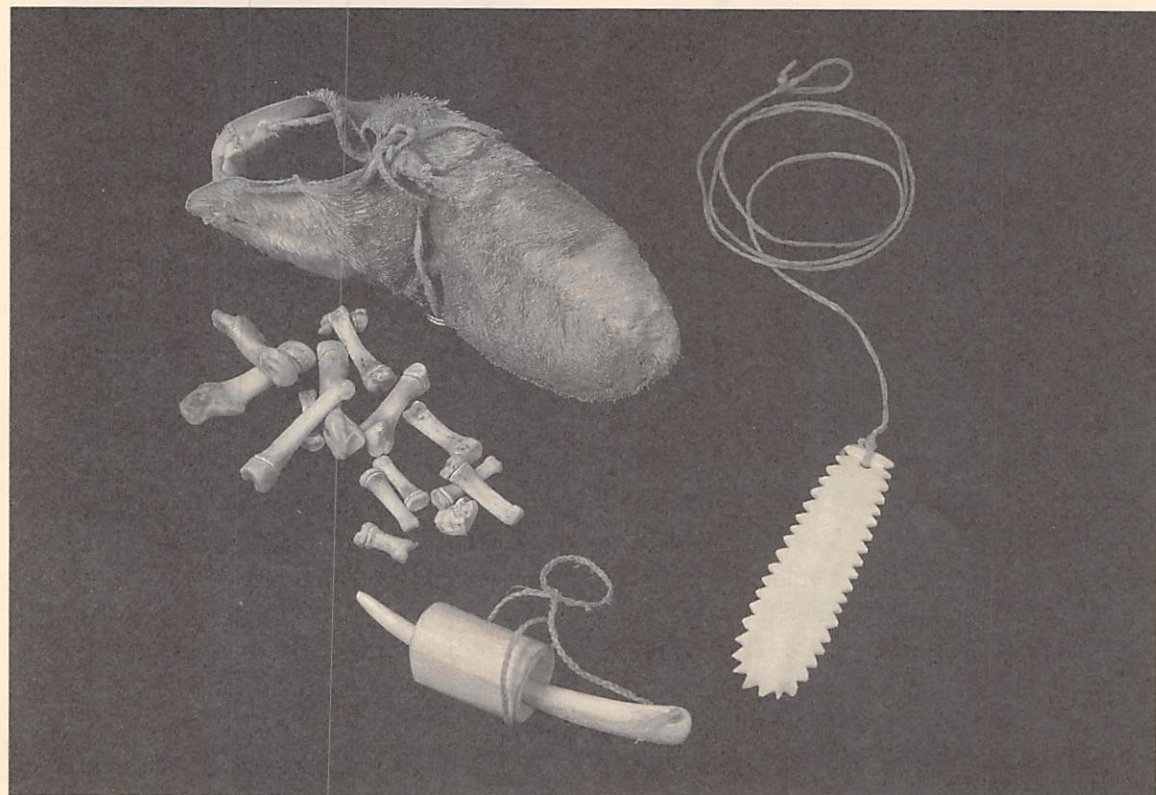


北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples



骨ゲーム、けん玉、うなり板
イヌイト

北方民族博物館だより
—第21号—

開館5周年記念企画展	2
講演会「ホモ・モビリティタス（人間）の旅」	3
講演会「世界・宇宙観の発展」	4
講座「ウイリタの文化を語る」	5
講座「アイヌ文化の映像記録」／Q & A	6
館長挨拶	7
News	8

ノーザンピープルズ
Northern Peoples

～北方地域にくらす諸民族～

平成8年2月6日～3月24日

2月10日に開館5周年を迎えたことを記念して、昨年10月に札幌市で開催した移動展に続き、本館において企画展を開催しました。

展示内容は移動展とほぼ同じく、それぞれ異なる地域に暮らしてきたサミ、ナーナイ、ウイльта、ニプフ、アイヌ、コリヤーク、イヌイト、北西海岸インディアン、アサバスカ・インディアンの9つの民族グループの歴史と文化について、民族ごとに紹介するものでした。寒冷で厳しい環境のなかで、さまざまな知識を集積して技術を開発し、自然と調和して暮らしてきた人びとの文化を知ることは、我々にとっても多くの示唆を与えてくれるものです。これらの民族文化について、共通性だけではなく、地域による多様性もご理解いただけたのではないかと思います。資料は衣類を中心として全99点で、写真パネルや映像資料などを用いながら、実際に使っていた「民族の顔が見える」展示に心掛けました。

なかでも、大型でユニークな文様の織り込まれた北西海岸インディアンのチルカット・ブランケットや、常設展示に同様のものがないコリヤークの女性用つなぎ服などは注目を集めていたようでした。展示室中央に置いたアザラシ皮製のイヌイトのカヤックは、アラスカのキング・アイランド型といわれるもので、他の資料と比べて大きいということだけではなく、無駄のない洗練された機能美から、イヌイトのクジラひげ製の荷物運搬用漕とならんで目をひいていました。

また、現在お茶の水女子大学教授の原ひろ子氏が、1961～63年にカナダの北西準州で収集したヘヤー・インディアン（自称カショーゴティネ）の資料を借用し展示できたことは、国内にも少ない貴重な資料だけに、意義あるものだったと考えています。

ふだん情報普及室において利用していただいている映像資料を、常時会場で上映してました



が、長時間にわたって見ていかれる人も少なくなく、このようなビデオを用意していることをアピールするよい機会になったのではないかと感じています。

2～3月は流水観光のシーズンで多くの来館者があったと同時に、観覧料が無料ということもあり、ほとんどの観覧者に企画展をご覧いただけたようでした。開催3日目に来館した紀宮殿下にも企画展をご覧いただくことができ、クジラひげやヤマアラシのとげなど動物のさまざまな部位を活かした北方民族の生活用具に、大変深い関心をお示しでした。

また会期中、記念講演会として『モンゴロイドの拡がりとその文化』をテーマに、自然人類学と文化人類学の立場からご講演をいただきました。ひろく人類の進化と民族の成り立ちを振り返り、地球規模で文化を概観することで、北方民族の特徴について改めて考える一助になったのではないかと思います。

次に、二つの講演の概要をまとめて報告します。

(学芸課 齋藤 玲子)

講演会

モンゴロイドの拡がりとその文化

「ホモ・モビリタス(人間)の旅」

平成8年2月17日

講師：京都大学助教授

片山 一道氏

今から約500万年前、人類の祖先は東アフリカで森林から草原へ出て、ゴリラやチンパンジーと別の道を歩み始めた。類人猿とどこが違うのかという事は、言い換えると「人間とは何ぞや」という人間論になる。古今東西諸説があり、学名の「ホモ・サピエンス；知恵のある者」をはじめ、「ホモ・ファベル；工作をする者」「ホモ・ルーデンス；遊ぶ者」などや、最近では「ホモ・アクアティクス；水辺に住む者」というユニークなものもある。

私自身は、地球上における人類を俯瞰的にみると、他の動植物が限られた地域に生息するのに対し人間はどこにでも居て多様性が高いことから、能動的に移動することが人間の最も大きい特徴であり、東京大学の大貫良夫氏との対談で生まれた「ホモ・モビリタス；移動する者」という言葉が、その性質をよく表すと考えている。

主題のモンゴロイドは、ヨーロッパのコーカソイドやアフリカのサハラ以南に暮らしてきたネグロイドと比して、最も広く多様な地域に移動した人種である。コロンブスが新大陸に到達する以前、環太平洋の先住民はすべてアジアから移動した人たちで、その居住域は地球の約2/3であった。

最初のアジアからの出発は、氷期に海水面が下がって現れた現在のインドネシア付近のスダ大陸から、オーストラリアとニューギニアがつながったサフル大陸への拡散で、最も古い遺跡が5万2千年前という推測から5~6万年前と考えられる。好奇心の強い人間は、隣の島から島へと海を渡っていき、アボリジニやニューギニア高地人の祖先となった。同じ頃か少し遅れてシベリアへの進出が始まり、2~3万年くらい前には北極圏に入り、アラスカまで辿り着き、北米中枢部には最終氷期末の1万2、3千年前に達し、その後1千~2千年の間に南米最南端に到達した。この早い



移動は「不適応拡散」と呼ばれ、大型草食獣狩猟のみを行い、狩猟圧で対象動物がいなくなると先に進むという保守的な生活様式がもたらしたものである。おそらく9割の大型獣が絶滅し、狩猟が不可能になり農耕を始めたのである。

人類最後の未踏の地、太平洋の島々に最初に現れたのはラピタ人と呼ばれる人びとで、約3,600年前ニューギニア東部に現れ、メラネシアやミクロネシアへも拡がり、それぞれの地域で適応して文化や体格まで変化させていき、わずか300年の間に西のポリネシアにまで拡がっていった。人骨もほとんど発掘されないことから、その実態はあまりわかっていないが、ラピタ人も漁撈民的性格の強い不適応拡散であったと考えられる。

最後にポリネシアのことをスライドを交えてお話ししたい。文化的には東南アジア方面からニューギニアを経て伝わってきたものが多いのだが、祖先の生地は中国沿岸部から日本の南西諸島、あるいはフィリピン辺りが源流である可能性が高い。ホモ・モビリタスの申し子ともいえるポリネシア人は、日本でも相撲やラグビーで活躍している人たちに見られるような大柄な体格に海洋民の名残をとどめている。現在のイメージ「南太平洋の楽園」は彼らの移動によって作られたもので、作物をカヌーで運んで植栽していったためである。ここでも多くの鳥類が絶滅しており、環境破壊は現在に始まった問題ではなく人間の拡散とともに昔からあったことである。そしてヨーロッパの植民地は減ったが、フランス領ムルロアでの核実験は記憶に新しい。

機会があれば、人間の壮大な旅を考えながら、美しい夕陽を見に行ってほしい。

講演会

モンゴロイドの拡がりとその文化

「世界・宇宙観の発展」

平成8年2月17日

講師：北海道立北方民族博物館長（当時）

大林 太良氏

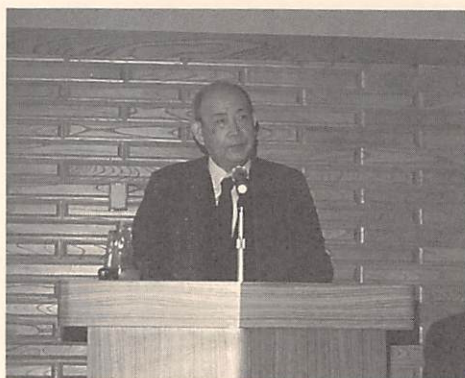
まとまった観念の存在には言語の存在が大前提となるので、世界観が発達したのは新人になってからだろうと思われる。本日は採集狩猟民、初期農耕民、古代文明という生活様式の変化による観念の3つの段階をとりあげる。これらは相対的なものであり、同時に存在したりすることもある。

まず、採集狩猟民の世界観の例を挙げると、本当の姿は人間と同じで、動物の姿は見せ掛けにすぎないという考え方があつた。また、動物の「主」が動物全体を統御しているという観念は世界の狩猟民に拡がっていて、ことに北方ユーラシアからアメリカ大陸にかけての地域に典型的に発達している。他の地域でも、ある特定の動物が狩猟の成否を左右するという考えや、それにまつわる人間の行動様式が細かく決められていた。

動物界の体系や組織として北方地域にいろいろな形で認められるのが、「陸の動物」と「海の動物」を区別する考え方で、カナダのイヌイトではカリブーとアザラシを同じ鍋で煮てはいけぬなどのタブーがある。

農耕では植物が重要となり、日本から東南アジア地域にかけて主な作物となっているコメにはいわゆる「稲魂」が、北米インディアンでもトウモロコシの精霊がある。これらの精霊（魂）は気難しい性格で、失礼なことをすると逃走し、翌年収穫できなくなると考えられているため、農耕には節目節目にさまざまな儀礼が伴うのである。

同様に非常に多いのが、祖先が豊作と関係あるという考えで、定住によって死者を葬った場所と生者との関係が密接になるとともに、作物を収穫することは植物を一度殺すことであり、死んだ植物から種をとり、また再生することを願う信仰では「死が生前提」であるという観念が発達しているからである。インドシナ半島の北から雲南省にかけては、稲が実ると、祭司が決めた日に稲と



香りの良い草を祖霊がやどる籠に結び付けて食事と酒を供え、収穫を行う。終わると祭りを開き、神聖な日であることから仕事をせず、何日か続けてごちそうを食べるのが正月とされている。農耕の周期が1年の動きを規定し、収穫が終わると正月で、この日は先祖を奉ることが大事であるとされる。英雄が死んだ母の胎内から生まれるという神話や、死体から作物が生えるという神話は広く分布しており、成年式で一度死んで生まれ変わるという儀式を行うのも、同じ考えに基づくものである。

最後に、古代文明地域やその影響圏では、宇宙の起源や構造に関する関心が出てくる。卵が割れて中から世界が生まれたとする「世界卵神話」は、インドをはじめ各地に見られ、いわば混沌状態で未分離である卵が割れると、天や地ができて分離し秩序が生まれる。また、太陽が夫で月が妻という神話（その反対もある）があり、昼と夜を象徴し、この二つは分離しているのが秩序で、仲が良かったり喧嘩するために近づくと日食や月食になるなど悪いことが起きると考えられている。

天にはいくつかの層があると考えられていて、その数によって、旧大陸では西アジア・インド・中国、新大陸ではメキシコを中心とする古代文明地域に発達した観念がそれぞれ隣接する地域に影響を及ぼしたと考えられる、興味深い分布がみられる。このような垂直的な観念に加え、平面的な構造を示すのが、太陽の運行と関わりを持つ東西南北の「四方」で、色と季節と方角が結び付けられることが多い。これらの世界観の体系から、時間の計算法にも十干十二支など2つの計算法が結び付いて、今日に受け継がれている。

「ウイルタの文化を語る」

平成8年3月3日

講師：資料館ジャッカ・ドフニ館長

北川 アイ子氏



当館のある網走市在住で樺太（サハリン）出身の北川アイ子氏に、ウイルタの歴史と文化について、自らの体験を通して語っていただきました。

樺太のツンドラ地帯にコケを求めて、移動しながらトナカイを飼って暮らしていたウイルタの人々。今世紀に入ってから、そんな伝統的な暮らしが出来なくなってしまいました。日露戦争後、樺太は北緯50度を境に北はロシアに、南は日本に分断されました。日本政府は、その地域に暮らしてきたウイルタをはじめニブフ、ウリチ、エヴェンキといった住民を、敷香（現ポロナイスク）近郊のオタスに集め生活させたのでした。北川氏は多来加（テルペニア）湾に面した野頃（ウラジミローヴォ）に生まれましたが、物心ついたときはオタスに住んでいたといいます。

以下に、北川氏からお話しいただいたことを紹介します。

オタスの教育所では日本人のような名前を付けられ、そこで日本人教師から受けた教育は、日本語や和裁など、まさに「日本人になるため」のものでした。トナカイを飼うことを放棄させられた大人たちは、食糧を得るため川で魚をとりそれを干したり燻製にして保存した。コメは狩猟した獣の皮と交換することで手にいれることができました。野菜を栽培することも日本人から教えられたが、移動生活を続けてきたウイルタには種をまくことが理解できなかった。

ウイルタ語だけしか話さない母親だったので、家庭ではウイルタ語、学校では日本語で過ごした。子供のときに、ウイルタの伝統文化について自然に身に付いたことは言葉の他にはなかった。自分たちの文化については、北海道に移住するまで考えたことはなかった。そんな暇はなかったと言うことだろう。現在、ウイルタ文様の刺繍をしたり、衣服を作る事が出来るようになったのはここ（網走）に来て姉から習ったからだ。

学校を終えた頃、オタスの若者は男も女も日本の軍隊に駆り出されるようになった。第二次世界大戦の最中である。男たちは国境付近での諜報活動、女は兵隊の食事の世話、トナカイのためのコ

ケ集めなどに従事させられた。1945年8月、ソ連参戦。ソ連軍がサハリンに進撃して来て、間もなく日本の敗戦となるのだが、引き揚げて行く日本人はオタスの住民に対して「君達はもともと（明治時代は）ロシアの人間だから、ソ連軍が来てても何もしまい」といった。この説明を聞いた私は、日本人として働いて来た事は何だったのかと思ひ、言い様のない怒りをおぼえた。その後、オタスの男達は、長い間シベリアに抑留された。そこで死んでいった者もたくさんいる。

私は、1967年までサハリンに暮らしていたが、それ以降は北海道・網走に移住した。それから30年近くたつ。兄ゲンダヌは、シベリアに9年近くも抑留されていたオタスの男達の一人である。その兄はウイルタの文化を残そうとここ（網走）に来てから一生懸命に努力した。それに引きずられるようにして自分も協力するようになった。

1978年には、たくさんの人達の協力を得て、自分たち民族のよりどころになる資料館ジャッカ・ドフニを建設することができた。初代の館長になったのは兄ゲンダヌで、私は兄の亡き後、その仕事をしている。ウイルタをはじめサハリンの少数民族の文化の火を消さないように資料館をこれからも守ってゆきたい。それと同時に、さきの戦争で犠牲になった男達の権利と名誉を回復したい。

サハリンを離れてから、これまで二度里帰りをした。ロシア国内の交通事情がよくないこともあって、訪ねたい所があっても、訪ねたい人がいても目的を果たさずに帰ってこざるを得ない状況だが、これからも、今まで出来なかった交流を進めたいと思っている。

自らが受けた深い心のキズを、柔和な顔付きでお話くださった北川アイ子氏でした。生活の場や言葉、名前までを奪われた民族・ウイルタ。考えなければならないことがあることを、知る必要があると思います。また現在、北海道ばかりではなくこの日本には、ウイルタ系日本人として生活をしている人がいることも忘れてはならないことです。

「アイヌ文化の映像記録 —上映と解説—」

平成8年3月16日

講師：北海道立北方民族博物館学芸員

齋藤 玲子

民族誌を記録する手段として、映画は非常に効果的なものです。古く、1910年代には極北探検隊が撮影した、いきいきとしたイヌイトの生活が残されています。

当時は、器材の重さや照明などの点で撮影には相当の困難があり、出演する側にとってもまた時間的・精神的に拘束されるという苦労をともなったものと考えられるうえ、民族学的な考え方が十分に発達していない状況ゆえに偏見の少なくないところもあります。しかし、いわゆる文明化・近代化の波にのみこまれるなかで、薄れゆく先住民の文化を何とかとどめていこうとする関係者の意思も強く読み取れるものです。

大正末期から戦前にかけて、日本人によるアイヌ民族文化研究が活発となり、北海道大学の動物学教室・附属博物館の関係者らをはじめとする研究者の、意欲的な調査が行われていました。撮影当時の記憶がある人もまだ健在で、追加情報を聞き取り調査をすることも可能な状況です。

当館所蔵の映像資料は、現在までに約250タイトルの作品を収集し、ビデオテープの形で保管しています。これらの映像資料は、特別展や今回のような講座などで公開しているほか、一部は情報普及室でいつでも閲覧することができ、またご希望があれば他の作品も館内でご覧になれます。当館職員が出向いて上映することも可能です。

アイヌ文化を記録した映像としては、今回上映した他にも（財）アイヌ無形文化伝承保存会制作の全集（23巻）等を所蔵しており、今後も貴重な映像の収集に努めていきたいと考えています。

<上映作品>

『北海道二風谷のチセイノミ』1934年撮影

『白老コタンのアイヌの生活』1925年撮影

『熊祭』（旭川近文）1935年撮影

*参考『Beautiful Japan（美しい日本）』（白老）
1918年アメリカ人により撮影

Q

イヌイトには動物の骨を使った遊びが多くあると聞きましたが、どのようなものがあるのでしょうか。

A

表紙の写真（左上）は「骨ゲーム」のセットです。袋の中にはアザラシのひれ足の骨が入っています。遊び方は2種類あり、1つは2人のプレイヤーが袋に入っている骨を分け、いかに正確にひれ足の骨格を並べ直すことができるかを競うやり方です。もう1つは、先に輪のついたひもで、袋の中の骨を一度に多く引き上げた方が勝ちとなるやり方です。この場合、特別に高い点数のついた骨があり、それをつり上げると有利になります。

このほか動物の骨を使った遊びには、縁が波形に削られた骨を回してブンブンという音を鳴らす「うなり板」（表紙写真右）や「けん玉」（左下）があります。けん玉には写真のようなタイプのほかに、小動物の肩胛骨などに大小の複数の穴をあけた「けん玉」があります。このタイプでは、小さな穴に棒が入るほど高い点数が与えられます。（学芸課 佐々木 亨）

学芸員実習のおしらせ

北方民族博物館では、次の日程で学芸員実習を行います。詳細についてはお問い合わせください。
（電話 0152-45-3888）

日程：平成9年1月28日（火）から

2月2日（日）まで6日間

受入人数：若干名

申し込み期日：平成8年8月31日まで

担当：学芸課 渡部 裕

4月1日付けで当館の初代館長大林太良氏が退任し、岡田宏明が館長に就任しました。

館長就任にあたって一ご挨拶とお願い一

北海道立北方民族博物館長
岡田 宏明

北海道立北方民族博物館が網走市に開設されて以来5年が経過した。広く北方諸民族の生活と文化に関する資料や情報を集めたユニークな博物館として、当館に対する評価はしだいに定着しつつある。この大切な時に、発足以来収集、展示および研究活動を指導してこられた大林太良氏から館長の職を引継ぐことになった。まことに光栄であり、身のひきしまる思いがする。今後は、大林前館長のあとをうけて、より高度な専門性と国際性をそなえた博物館をめざすと同時に、入館者の方々をはじめ一般の道民や網走市民の皆様に、より一層親しんでいただける方向に当館を発展させていきたいと考えている。よりよい博物館をつくるために、館員の努力だけではなく、「友の会」や地域住民の方々のご理解とご支援がどうしても必要なことは、先進諸国の博物館の例が示す通りである。

北方諸民族の生活の知恵の発信基地としての当館の発展をどうか暖かく見守っていただきたく、館長就任のご挨拶をかねて、お願い申し上げるしだいである。

勇退の弁

北海道立北方民族博物館前館長
大林 太良

北海道立北方民族博物館は、1990年に設立、1991年に開館された。私は設立とともに初代館長の重責を負い、微力をつくして来たが、本年2月に無事開館5周年を迎えたので、これを機会に館長の職から退くことにした。

短い期間ではあったが、職員、関係機関各位の協力によって、本館は世界全体を対象とするのではなく、狭い地域だけを取り上げるのでもない、その中間の広域における住民とその文化を専門とする特色ある博物館として、その地位を確立することができた。毎年の国際シンポジウムもあって、国外からも日本における北方民族研究の中心として認められるようになってきた。これは私にとって大きな喜びである。今後も、一層内容が充実し、研究の拠点としても、また生涯学習の場としても、ますます発展を遂げることを期待して止まない。

最後に協力をおしめなかった皆さんに感謝の言葉を述べたい。

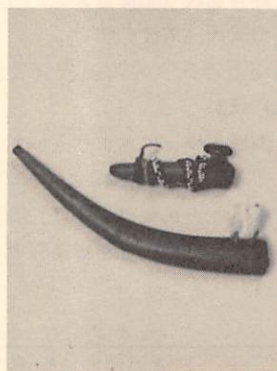
第11回特別展

たばこと民族文化一たばこが北方へ伝わるまで一

7月13日（土）－9月22日（日）

当館特別展示室（有料です）

北方地域における嗜好品しこうひんはあまり種類が多くありませんが、その一つがタバコです。タバコが北方諸民族に紹介されるや、急速に広く受け入れられていきました。本展示では、北方諸民族の文化に少なからず影響を与えた外来文化の一つであるタバコをテーマに、歴史や利用方法、嗜好品の意味などを探ります。





展示を観覧される紀宮殿下

観覧料変更のお知らせ

4月1日から、小学生、中学生、高校生の常設展示観覧料が無料になりました。

平成8年度の主な行事

◆第11回特別展

『たばこと民族文化—たばこが北方へ伝わるまで』7/13-9/22

◆講演会

『たばこの文化史』7/28

講師 半田昌之氏(たばこと塩の博物館学芸員)

◆講座『教師のための北方文化研修会』9/14

講師 福岡イト子氏(日本私学教育研究所客員研究員)

発表者 生田浩之氏(丸瀬布町立丸瀬布中学校教諭)

◆講習会『フィールドワーク in 天都山』9/15

講師 福岡イト子氏

◆第11回北方民族文化シンポジウム10/3、4

◆博物館フォーラム・博物館と地域研究『モヨロ貝塚とオホーツク文化を考える』11/8

天野哲也氏(北海道大学)

前田潮氏(筑波大学)

大沼忠春氏(北海道教育委員会)ほか

◆企画展『作ってみよう入ってみよう「きたのすまい」』2/4-3/16

◆講座『北方民族のこぼ』3/2

講師 大島稔氏(小樽商科大学教授)

寄贈資料紹介

○ウイльтаの衣服

網走市の北川アイ子氏から以下の資料が寄贈されました。

衣服(ウイльта) 1点

執筆者から贈呈を受けた書籍(1月~3月)

大林太良 1995『北の神々 南の英雄』小学館

平口哲夫ほか 1995『日本海の鯨たち5』日本海セトロロジー研究グループ

荻原真子 1996『北方諸民族の世界観』草風館

主な来館者

2/8 紀宮殿下

2/10 中国瀋陽市視察団一行

その他の行事報告

1/27 博物館クラブ「ガラス教室—とんぼ玉づくり」講師 笹倉いる美(当館学芸員)

1/28 講習会「ガラス工房—とんぼ玉づくり」講師 笹倉いる美

2/10 博物館クラブ「イグルーをつくろう」講師 佐々木亨(当館学芸員)

観覧者動向

1月~3月

	常設展示
1月	560名
2月	2,054名
3月	1,745名

平成7年度の常設展示観覧者数は43,337名でした。

◇職員の異動◇

退職(3月31日付)

解説員 奈良 恵

採用(4月1日付)

解説員 石原 生久代

編集後記

講座でお話いただいた北川アイ子氏が館長の資料館ジャッカ・ドフニは、冬の間はお休みでしたが4月29日から開館するそうです。

(笹倉)

博物館の刊行物

平成5年から3回にわたり開催した、博物館フォーラム・博物館と地域研究『アイヌ文化の成立を考える』の報告書を刊行しました。